

合同企画展「龍大生が語る 京都の町と祈り」を通して(1) — 平安京東市と七条町の移り変わり —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

2018年度合同企画展について

2018年度に、京都市考古資料館と龍谷大学大学院文学研究科日本史学専攻・文学部文化遺産学専攻の合同企画展を実施しました。展示は、京都の歴史について日々研鑽を積んでいる大学院生の研究を紹介するというコンセプトのもと、「龍大生が語る 京都の町と祈り—東市、七条町、醍醐寺—」とテーマを設定し、Ⅰ部では平安京の東市と七条町を、Ⅱ部では醍醐寺の町石についてスポットを当て、学部生の協力のもとで行ないました。

Ⅰ部では、龍谷大学大宮学舎「東巖」の建替え(図1の1)と龍谷ミュージアム建設(図1の2)の際に実施された発掘調査の資料を中心に陳列しました。2度の調査では平安時代から江戸時代にかけての遺構と遺物を確認し、平安京の東市から西本願寺にかけて各時代の人々の営みが明らかになりました。

平安京の東市 その中でも、ここでは東市と七条町について、その移り変わりをみてみましょう。まず東市とは、下京区の西本願寺・興正寺・龍谷大学大宮学舎付近一帯にかけて存在した平安時代の官営の市のことです。『日本紀略』によれば、遷都の3か月前に平安京へ市を移していたと記載が



写真1 「厨」銘緑釉陶器(底部径8.4cm)(写真/龍谷大学文学部提供)



写真2 大宮学舎東巖出土の鑄造資料(写真/龍谷大学文学部提供)

あります。

東巖から出土した東市に関連する資料には、何本も平行線が彫られている土師器の皿(平安時代前期)や「厨」と線刻された緑釉陶器(平安時代中期)の底部があります(写真1)。前者は平安京の造営期にあたる一括資料で、市で働く丁

層(下働き)の人たちが所有者を示すために印を付けた可能性が考えられます。後者は陶器の底の高台にあたる部分に「厨」と彫られている珍しい資料で、東市の一面に食事を司る厨房のような性格を持った役所があったと考えられます。この緑釉陶器は9世紀後葉に井戸



図1 平安・鎌倉・室町時代の鑄造関連遺構・遺物の検出、出土地点

(清水真好「七条町とその周辺の空間的変遷—市・町における鑄造活動を視点に—」『龍谷日本史研究』第41号、2018年より)

を埋め戻した際の埋土から出土していることから、東市の「厨」が機能しなくなったことを契機に埋められたのではないのでしょうか。

商工業の町・七条町 平安時代の終わり頃になると、律令国家の衰退に伴って市は廃れ、代わって七条大路（現在の七条通）と町尻小路（現在の新町通）を中心に七条町と称される商工業地帯がひろがります。この地域では、金属器の生産・加工に携わる職人（鑄物師・細工師）や、借上・土倉と呼ばれる金融業者が商売を営み、室町時代まで継続して活動をしていました。これらの活動は平安京の幹線道路である七条大路がキーワードとなりそうです。

それでは、七条町についてみてみましょう。先述したように、七条

町では金属器の生産・加工や金融業が盛んでした。金属器の生産・加工に関連する資料には、鑄型、鑄羽口、取鍋、鉋滓などがあり、東巖から出土した資料群（写真2）もその証左ではないかと考えられます。鎌倉時代の『拾遺抄注』という史料に、「市門ハ、七条猪熊ナリ、七条町トイヘル」とあります。ここから、鎌倉時代には七条町と呼ばれる一帯が七条大路と猪熊小路が交差する地点（龍谷大学大宮学舎南門付近）までひろがっていたことが裏付けられます。そこで、鑄造資料から七条大路周辺の空間変遷を抽出したところ、平安時代から室町時代にかけて七条大路と町尻小路を中心として同心円状にひろがる様子がみてとれ（図1）、時代を

ことを表していると考えられます。

まとめにかえて 平安京内では、毎年数多くの発掘調査が行なわれています。遺跡調査には、歴史を解明する面があれば、地層に残る歴史を破壊してしまう側面もあります。そのため、一人でも多くの方が記録や記憶に遺して後世に伝えていく必要があります。今回の展示では、主として龍谷大学構内の調査で出土した東市と七条町に関する資料を扱い、平安京の東市と七条町の移り変わりについて、遺物からみる考古学の視点と、史料からみる文献史学の両面から検討しました。もちろん、成果はこれだけではありませんが、この機会を契機として七条地域に代表される都市遺跡に関心が高まれば幸いです。

(龍谷大学大学院 清水真好)